

《手書き－1》

人生の目利きになる

山本一力氏

はじめまして。山本でございます。

今日の演題、人生の目利き云々。私は自分が人生の目利きであると思ったことは、ただの一度も、今に至るありません。まったくありません。ただ自分で自信を持って言えるのは、ひたすら今まで、社会人になって今日に至るまで、もっと言えば14の年で高知から東京へ出て来た、昭和37年から今日まで、セールスをひたすらやってきた自負はあります。このことにおいては、私は強い自負を持っております。

セールスを鍛えられるということは何かと言えば、相手があります。自分だけでセールスなど成り立ちません。あれは相対のことです。物を売り込もうという人間と、よければ買ってもいいという人間、もしくは売り込まれるのは嫌だと思っている人間、どちらにしても相対の中で物事が進んでいきます。

今の時代を見ていて強く思うことがあります。本当に強く思うことが。それは多くの人が自分の中で自己完結ができていて、相手と何かをするという意識が大変に希薄であるということです。これは驚くばかりです。

今日、時間が90分だそうです。90分しゃべるのも大変ですが、聞く方はもっと大変。愚にもつかない話を、会場に入ってしまったばかりに、途中で出ることもできずに90分付き合うのは、本当に大変です。ということは、今私は皆さんに対して売り込みをしています。司会の方は私を、直木賞の云々とおっしゃった。直木賞の贈呈式に自転車で東京会館へ行ったエピソードもお話してくださった。でもそれだけのこと。だからと言って90分がもつ保証はありません。

私がやらなければいけないことは、90分皆さんを寝かせずに、この部屋から出て行かれずに話を聞いてもらう、私の使命はそれです。聞く側に何の義理もありません。ここが今の人たち多くが誤解していることです。

私の生業は物書きです。毎日朝から晩まで小説を書きます。今日も出がけまで書いていましたし、この後も明日の朝まで、もう締切りを過ぎてしまっている原稿を書かなければいけません。私の担当編集者はここで私がこんなことをしゃべっているのを見たら、「何をやっているの」と言うかもしれない。でもそれが私の生業です。

物書きはひたすら原稿を書いて、連載になり、時には書き下ろしであったりして、様々なプロセスを経て書店に並びます。今日も丸善さんがご協力をくださっていると伺いました。自分の本が書店に並ぶのはうれしいことです。でもそれは並んでいるだけのこと。山本さん、本がいっぱい積んであったよと言われると、複雑な思いがします。売れてないのかと。でも、そこに積んでもらえないと、セールスの入り口にも立てない。積んでいただいても、在庫の山かもしれない。読者がお金を出して買って来て、本が一冊へこんで初めて売れていることになります。

評価点：以下の講演意図が分かること

講演者はセールスに自負を持ってきた。その仕事から相対が重要だと考えている。だが、最近相対の意識が希薄である。作家は1日中、原稿を書くのが仕事。だが、本は買って読んでもらわないと。それも相対の一つである。

《手書き－2》

補聴器についてやさしく学ぼう 浜田豊彦

左の上はキンキンした高い音が聞こえにくいという形です。一般的には一番多い。歳をとってだんだん聞こえにくくなった方は、高い音が聞こえにくいのが多いです。

左の下、これは音の高さで4000Hzのところはボコッと落ちている。こういう難聴もあります。造船所で働いているとか、缶詰工場で働いているとか、騒音が大きな、うるさいところで働いている人に多い難聴です。いわゆる騒音性難聴。最近だと若い方がウォークマンでずっと音楽を聴いたりしています。これと同じような難聴が出てきます。この4000Hzがボコッと下がる方は、困ったことがあるかと聞いても何も困らないという。会話は聞こえるから。うるさい工場で働いて難聴になっていてから耳栓をしたほうがいいと言われても、大丈夫と放っていると、この谷が深くなります。そして会話も聞こえなくなって、困ることになります。

今度は右上。低いほうの音は正常です。ですが、高い音は最重度の難聴。すっと聞こえが落ちているタイプ。こういう方は、自分がどうして聴覚障害なのか人に説明するのが困難なタイプです。昔、障害者センターに勤めているとき、こういう方がいました。その方は将来看護婦さんになりたいと言っていました。聴覚はこのとおり。補聴器をつけたことがない。低いほうが正常ですから。お友達とおしゃべりするには困らない。補聴器をつけるように言っても、補聴器で補うべきところはキンキンしたところ、それも大きな音を入れてあげなくてはならない、だから聞こえている低い音はうるさいということ。補聴器はうるさいだけで役に立たないし、私は聞こえるから、と言われる。ところが、看護婦さんになる病院実習がありました。患者さんのベッドサイドで介助をするとき、お年寄りがぼそぼそとしゃべるわけです。周りの実習生は聞き取れててきばき動けるのに、自分は患者さんがしゃべっているのはわかるが、なにを言っているかがわからず動けない。実習に行くと、看護婦さんになる自信をなくしたと相談を受けたことがあります。その方は看護婦さんになるのをやめて、別の職場に変わりました。公務員、図書館でしたが、そこでも不特定の人から電話がくるとわからなくなる。それで、上司に自分がどう聞こえないか説明したいが、自分でも聞こえるときと聞こえないときがあり困っている、どう説明したらいいかとすごく悩んで相談を受けたことがあります。

最後は低いほうが聞こえなくなっている方。多くの場合は中耳炎でこういう難聴になります。原因や難聴の進み方でオーディオグラムの形も特徴的なものがあります。だから自分

のオーディオグラムを1年に1回ためておくといい。

ちょっと見にくいかもしれませんが、皆さんの資料にも同じものがあります。「アイウエオ」の母音はこのへんに成分があります。茶色のところ。緑色が「さしす」という音が入っています。「がざば」というのもこの辺にあります。上のほうには「さきやき」もあります。

評価点：資料のオーディオグラムのタイプの説明内容が正しいこと。それぞれの難聴の形の説明が資料に即して読み取れること。難聴のタイプによるエピソードが盛られていること。資料を使い、通訳できること。

《パソコンー1》

脳と人間 茂木健一郎

ゆっくりとしか変っていかないと考えると、習慣という問題につながります。松本人志さんとか、夏目漱石など文化的な業績を残した人はどのようにできるか。才能だというでしょ。でも才能だけでそのような脳味噌はできない。習慣が大事。飽きずにやり続ける、習慣が大事だということを中心にお話したいと思うんです。

ことばを考えるとわかりやすい。皆さんは日本語を理解できますが、どう日本語を身につけてこられたのか、毎日飽きずに繰り返してきたでしょ、ことばが飽きちゃったでは困ります。日本語が飽きてきた、そろそろスワヒリ語にするかとか、いないですよ。流暢に日本語を使えるのは日本語を使う習慣があったから。松本人志さんは人を笑わせる習慣があった。松本さんとしゃべって驚いたが、何言ってもおかしいんです。これ異常です。ありえないでしょう？ずっと笑わしてる、周りの人を。すごいですね。参考までに。大きなことを成し遂げて世間がすごいという人は、周囲の人はすごいと知っている。このなかでブレイクしたい方、普段は普通で突然ブレイクは無理です。周囲にあいつはすごいと言わせる何かを持っていてそれでブレイクできるか、あとは確率の問題、めぐり合わせとか。すごいといわれる状態がないとブレイクはない。

ことばは毎日使って徐々に磨かれる、これは脳の記憶の問題です。記憶力がいいイメージは？新幹線のこだま号の駅を言える、大阪環状線の停車駅言えるとか。それ記憶力ですか。現代の脳科学はそう考えません。年号や歴代首相の名前はコンピュータで簡単に調べられる。インターネットで。そのような記憶力の張り合いをコンピュータとやっても勝てない。人間は得意なことに特化した方がいい。

人間の脳は記憶を正確に覚えるのは得意ではない。得意なのは記憶を編集し、新しい意味を見出すこと。皆さんの脳は日々たいへんな量の情報を受け取る。これを夜眠っている間に編集します。昼間は入ってくる情報を受け取るのに手いっぱい編集する時間はない。一日の終わりには未編集の情報が大量にたまりま。整理しないと脳の記憶システムがパンクしてしまう。だから、眠るんです。

眠っていても脳は休んでいない。大変なスピードで昼間の情報を編集する。その過程で新しい意味や発見が脳に蓄積されます。ことばの意味を辞書を引いて覚えられないでしょ。あたたかいはどういう意味？このお湯は温かいといえますか。きょうの日差しは温かいというか、あの人の心は温かいというか。このカーペットは温かいというか。あの犬は温かい・・・、ネイティブの人は温かいが変か変じゃないか、どういう意味か瞬間に判断できる。これは辞書に載ってない。ネイティブスピーカーはことばの意味を瞬時に文脈で理解し、伝えられる。それは生まれてから膨大な量の日本語が脳に入ってきているから。脳が習慣としてずっと受け止めてことばの海が蓄積されている。

落語家は一生ことばを磨き続けるでしょう。

評価点：以下の講演意図が分かること

習慣の重要性、同じことをやり続けることの意義を松本人志の例で語っている。日々使う言葉も習慣の中で深くなり、適不適が即座に判断できる。人間の記憶は暗記ではなく、編集である。

《パソコンー2》

障害学入門

石川 准

階段とスロープで考えてみましょう。階段は配慮でなく、スロープは配慮だと多くの人は思っています。これもおかしな話で、その証明は簡単です。階段を撤去した建物をイメージしてください。私たちは垂直移動できない。伝統的な「医療モデル」だと「筋肉トレーニングをやってジャンプ力を鍛えればいい、2階まで跳べるようにすればいい、これが最優先のアプローチ」ということになります。しかし、筋トレで2階まで跳べるようになる人はかなり少数。そこで、つぎに福祉機器を開発することになり、靴の底にバネなんかつけて、ジャンプ力の弱さを補う支援技術を作るわけです。それでみんな跳べるようになる。これがリハビリテーション。次は福祉機器を個人に適用させる、というアプローチ。従来のリハビリテーションや福祉ではこれを要求してきたのです。

階段の例でもわかるように、階段をつければいいだけです。これが「社会モデル」になります。無理な筋トレをやったり、福祉機器だけに頼るのではなく階段をつければいいということです。1人ひとりが求めている階段は違います。ある人は文字どおりの階段、別の人にはスロープが階段にあたる。また別の人にとってはエレベータが階段にあたる。もっと別の人には人的なケアが必要かもしれない。個々が求めるいろいろなタイプの階段を提供するのが社会モデルの考え方です。

私は3月にロサンゼルスに行きました。空港付近のホテルでしたが、その付近一帯が停電になり、14階の自分の部屋まで1階から階段を上りまして大変でした。やっと上がったから鍵が開かなくて、もう一回下まで戻ったり。階段だけでは高い建物だと疲れてしまうので、エレベータをつけるわけです。建築基準法では31メートル以上の建物だと非常用のエレ

ベータをつけないといけない義務があるそうで。政令では5階以上とか。6階以上の建物にエレベータをつけなくてはいけないとなっているかもしれませんが。

多くの人の都合に合わせてルールとか設備や配慮は黙っていても提供され、配慮しあっているのです。私たちもいつもマイノリティの立場ではなく、多くの局面ではマジョリティの側にいて、そういう配慮を享受しています。ときどき、マイノリティ、配慮されない側に身を置くことがあるということだと思います。

字幕もそうですね。外国映画で吹き替えがなければ、ほとんどの人は外国語を理解できませんから、英語、フランス語など黙ってても字幕が付きます。日本語の放送はクルーズドキャプションで、それも聴覚障害者ががんばって運動してやっと少しずつついてきました。

アメリカのADA法には「合理的配慮」という言葉があります。公的な場で合理的配慮がされてないとADA違反になります。それを参考にしてDPIは「合理的配慮を行わないことは差別」ということを盛り込んだ障害者差別禁止法を作るべきだと主張しています。

評価点：医学モデル、社会モデルの意味を理解しており、従来のリハビリや福祉の考え方を階段の例を使って説明している点がおさえられていること。障害者運動や社会福祉の知識によりADA, DPIなどのアルファベットの略称を正確に使えていること。